

図書館だより



平成 28 年 2 月 26 日発行

今年4年に1度のうるう年。オリンピックのある年であり、2月29日がある年です。この29日が誕生日の人は秋草にもいるでしょうか。4年に1度しか誕生日が来ないというのは寂しい気もしますが、その分、4年に1度の特別感他の人では味わえないものですし、素敵な誕生日となることでしょう。図書館には、誕生日事典や誕生花と花言葉の本など、誕生日にまつわることを知ることで本も色々揃っていますので、手に取ってみてください。

さて、2月はチョコレートの本がとても人気でしたが、3月間近となり、お菓子の本が動き始めています。最近はお友達同士でホワイトデーにもお菓子を交換するのが定番となってきているのでしょうか。お菓子のレシピに関しても、簡単に作れるレシピ、バターや牛乳を使わないレシピ、豆腐を使ったヘルシーなレシピなど、色々な本が揃っていますので、何を作ろうか困った時には図書館へやって来てください。いつでもレシピ探しのお手伝いをしますよ。

誕生日にまつわる感動ストーリー*

914.6-ツ『この世で一番大切な日』 十川 ゆかり || 著 サンクチュアリ出版

みなさんは自分の誕生日に大切な思い出はありますか。365日いつでもどこかで誰かが誕生日を迎えています。特別なことなんて何もなくただ過ぎていく誕生日もあるけれど、一生忘れられない誕生日になることもあります。この本では、様々な人の特別な誕生日のストーリーが綴られています。友だちが用意してくれたサプライズのプレゼントに涙した誕生日、16年分の思いが込められた結婚指輪を送られた誕生日、いつの間にか溝ができてしまった先生と仲直りをはかった誕生日などなど、涙なしには読めない特別な誕生日ばかりです。どの話からもその人と大切な人との強い絆が伝わってきて、自分の家族や友だちをもっと大切にしていきたいという気持ちになります。

豆腐ってすごい*

596-ス『豆腐でつくるヘルシースイーツ』 鈴木 理恵子 || 著 誠文堂新光社

ティラミスやチーズケーキなど豆腐で作ることのできるスイーツがあるのは、みなさんも知っているかと思いますが、それでもこの本を見ると、きっと驚くはず。豆腐、豆乳、そして、油揚げを使ったスイーツのレシピには「こんなスイーツまで作れるなんて！」と衝撃を受けます。特に気になるのが油揚げですが、しっかりとおいしそうなシュークリームやアップルパイに変身していて、どんな味に仕上がっているのか気になります。使っているクリームも豆乳クリームでヘルシーです。簡単に作れそうなレシピもたくさん載っているので、ぜひ一度試してみてください。



贈る言葉に代えて

まだ少しだけ早いですが、3年生のみなさん、卒業おめでとうございます。

たくさんの期待と不安を抱えながら、踏み出すみなさんに図書館からもエールを送りたいと思います。本を読むことは誰かに強制されたり、制限されたりするものではありません。自分の心が欲したとき、好きな本を好きなだけ読んでください。この3年間でたくさんの本を読んできた人にはこれからも色々な本と出会ってほしいですし、全然本に触れなかった人にもふとした瞬間に本との出会いが待っていてほしいなと思っています。本は心を豊かにし、表現の幅を広げてくれます。落ち込んだり、悩んだりして、心がふさがりそうになった時、静かにその気持ちに寄り添ってくれます。私もたくさんの言葉と本の中で出会い、励まされました。ここで紹介する本がいつかみなさんの励みになれば嬉しいです。



913.6-ツ『この世にたやすい仕事はない』 津村 記久子 || 著 日本経済新聞出版社

“どの人にも、信じた仕事から逃げ出さなくなると、道からずり落ちてしまうことがあるのかもしれない”

長年勤めてきた仕事を、燃え尽き症候群のような形で辞めた私。働きたいのか働きたくないのかよくわからないが、とりあえず職を探し、相談員さんに勧められるまま、様々な仕事を体験していく。監視カメラの見張りをしたり、バスのアナウンスを作ったり、おかきの袋の話題を考えたり、路地を訪ねながらポスターを貼ったり、大きな森の小屋で働いたり、一風変わった仕事ばかりだが、いざ働いてみると、どの仕事にもやりがいがあるからおもしろい。悩んで、工夫して、また悩んで、やっと上手いって…、気持ちは弱っているはずなのに、いざ働くとい生懸命な自分がある。その中で自分が意識的に逃げたこととも向き合っていく。自分と仕事の関係に悩む時がきたら息抜きにどうぞ。

914.6-ワ『置かれた場所で咲きなさい』 渡辺和子 || 著 幻冬舎

自分のやりたかったことと現実が、違ってしまうのはよくあることです。行きたかった学校、就きたかった職業、でも力及ばず思わぬ道に踏み込んでしまう。その時、こんなはずじゃなかった、思い通りにならなかったのは自分のせいじゃない、周囲は私の気持ちをわかってくれないと、いじけてひねくれてしまつては、人生がもったいないです。著者は「置かれた場所で咲きなさい」と言います。どんなところに置かれても、そこで環境の主となり自分の花をさかせよう、仕方がないと諦めるのではなく、自分が笑顔で幸せに生き、周囲の人を幸せにすることによって、そこに置かれたことは間違いでなかったことにしようと言うのです。著者はシスターで、マザーテレサとの思い出にも話が及びます。辛い時この本を読めば、温かく抱きしめられる感覚を味わえると思います。

今月の知っておきたい〇〇の世界

今月の知っておきたい〇〇の世界、第9回目の今回は地震の世界です。来月の11日で東日本大震災から5年が経ちます。日本中が大きな悲しみに包まれたあの日からもう5年。被災地では今も日常を取り戻せずにいる人たちがおり、長い復興への道のりを歩んでいる人たちがいます。私たちはそのことを胸に刻み、改めて自分にできることを考えていかななくてはならないのではないのでしょうか。

4つのプレートの上にある日本列島では、いつまた大きな地震が起こるかわかりません。最近、関東も大きな揺れに何度も見舞われています。ですから、震災に備えて、今できることをしっかり考えておくこともとても大切なことです。自分の身を守る術を学び、万が一の時に咄嗟の判断に迷わないようにしましょう。



地震のしくみ*

453-オ『地震』 尾池 和夫 || 著 ナツメ社

地震大国と呼ばれる日本。しかし、実際に地震の揺れを体験し、危機感を持って生活をしている私達ですが、地震という現象に関する知識は意外と少ないのではないのでしょうか。地震という現象について知ることもまた地震に備えるという行為のひとつだと思います。

この本では、なぜ日本列島では地震が多いのか、地震はどんなしくみで起こるのか、地震の大きさはどう測るのか、噴火・津波と地震の関係など、様々な視点から地震という現象について解説しています。言葉だけではなかなか想像しづらいものですが、図を多く用い、予備知識がなくても読めるように説明がされています。まずは興味のある章から読み始めてみましょう。

あの日を忘れない*

369-ガ『16歳の語り部』 雁部 那由多/津田 穂乃果/相澤 朱音 || 著 ポプラ社

東日本大震災発生時、小学5年生だった著者たち。あれから5年が経ち、高校生となった彼らは今、語り部として自分たちにしか語れない“あの日”を伝える活動をしています。「一言も聞き漏らすことのないように。」この本の案内役である佐藤敏郎さんの言葉のとおり、高校生の彼らの言葉からは、報道だけではわからなかった被災地の様子が浮かび上がってきます。凄惨な現実、胸に湧いたくさんの疑問、積もっていく苛立ち、ひとりひとりが抱える後悔や苦悩、本当にたくさんのことが入ってきて、考えさせられることがたくさんあります。どこか綺麗事ばかりで覆われてしまっていたこと、「頑張って」「ありがとう」という言葉の重み、全てを分かち合うことはできなくても、あの日のあの揺れを同じ日本で体験した私たちも共に震災を風化させないよう暮らしていきましょう。

万が一に備えて*

369-チ『震災のときあったらいいもの手帖』 住まいの学校

実体験を元に震災後の暮らしで役立つ用品を紹介した1冊。大震災を受け、防災用品を置いている家庭というのはいくつあるかと思いますが、揃えておきたいものが思った以上に多いことに改めて気がつきます。この本を読んでいると、普段の用途以外の使い道も紹介されていて、「こうやって使うことで、こんなことにも役立つのか！」と発見もあります。自分の家には、何が揃っているか、また、そこに加えておきたいものはないか、家族と一緒に読みながら確認してみてください。今は「本当に必要な？」と思うものも実際、避難生活を送る時には「あってよかった！」と感じるものなのだと思います。巻末には災害時の心得として、避難時や避難場所で注意することが載っています。こちらも併せてよく頭に入れておきましょう。

図書館司書の「今月はこの本を読みました」

奥田英朗さんの『我が家のヒミツ』(913.6-オ 集英社)を読みまし

た。『家日和』、『我が家の問題』、そして『我が家のヒミツ』と続くこのシリーズは家族の日常を描いた短編集で、いつも楽しみに読んでいた私のお気に入りです。今回も「お父さん、大丈夫かなあ」、「奥さん、あんまり無茶しないでね」、「娘よ、父を大切にすのだから！」などと、家庭で起こる様々な出来事を読みながら一緒にハラハラしていました。毎度、トリに登場する大塚家は相変わらず元気な奥さんがアクティブに活動していて「奥さん、パワーアップしているな」と思うと同時に、子どもたちが大きくなっているのに驚き、馴染みの家族の近況を垣間見たような気持ちになりました。どの家族にも目には見えないけど、触れる度に心が温かくなるかけがえのない絆があって、一編一編読み終わるごとに、「ああ、よかったなあ」と自分の心も和みました。また、次回が待ち遠しいです。【今井】



『とりかへばや物語』 田辺 聖子 || 著 (B913.3-ト 文藝春秋)を読みました。

古典の『とりかへばや物語』を現代語に訳したものです。『とりかへばや物語』といえば、少女小説家の氷室冴子さんが書いた『ざ・ちえんじ!』もこのお話しをもとにしたもので、マンガにもなったので知っている人もいないのではないのでしょうか。少女向けに読みやすくアレンジされているせいもあり、ノリもよく、とても面白いお気に入りの小説です。今回、より原作に近い田辺さんの方を読んだのですが、やはりとても面白かったです。子どもの頃もし自分が男の子だったら、もっと自由に大胆に冒険したり遊んだりできたのにと感じた気持ちを、満足させてくれます。そして平安末期に生きた人々も、現代とそう大差なく人間関係に悩みながら、恋をし、日々を過ごしていたと思え、遠い昔をちょっとだけ身近に感じる事が出来ました。【鈴木】

